

## ダンサーが自らの身体に課すこと

筑波大学大学院准教授・体育 平山 素子

どちらかという「創造力」をキーワードに振付家を中心とした作品作りに集合するダンサー達によって踊られていた日本のコンテンポラリーダンスも、ここ数年で大きな変化が生じているように感じられます。それはダンスクラスの数の増加です（ただし、まだ首都圏限定）。ダンストレーニングは通常「レッスン」と呼ばれ、一人の教師が多くの人を教えるダンスクラスの形式で行われています。バレエやモダンといったジャンルではすでに多くのダンスクラスが開講され、いわゆる身体コントロール能力を培うテクニックを学ぶ場として全国的に普及しています。これまでは集中型のワークショップの場において個別のダンサーや振付家の思考や、スタイルを体験するといった、あくまでも非継続性、そして非共通性のようなものを体験する場を提供していたのがコンテンポラリーダンスでした。これが個性を感じる最大のチャンスであり、まさに武者修行のような感覚でもあったのです。しかし近年では「どうしたらコンテンポラリーダンスが上手になるか？」といった声の高まりを受け、継続性のあるレギュラークラスが増加傾向にあるのです。ここで求められるのは指導者の高いスキルと個性はもちろんですが、多様な振付家に対応できるコンテンポラリーダンススタンダードのようなものを感じるように感じます。バレエは教本を持ち、流派に分かれるにしても共通理論を持っています。一方で、そもそもコンテンポラリーダンスは自己で理論を定義づけ、そして活用する「個性」や「自己批評性」が特徴であり、本来は共通理論を否定する存在であるといえます。互いに刺激し合って挑発をされてさらに次なる身体表現が誕生する。このおもしろさがコンテンポラリーダンスの魔力なのです。

では、

コンテンポラリーダンススタンダードとは？

コンテンポラリーダンスが上手いとは？

その判断には多くのダンサー達が迷いを隠せないでいるのが現状です。私自身も明快な答えを提供できない歯がゆい思いをしています。これまで私自身は振付家の要求に正面から向き合い、その都度身体を投げ出して表現者としての強度を獲得してきました。時には身体を痛めつけるような表現も多々あり、相当苦労しました。まさに、ひとつひとつの経験が全てでした。（当時、コンテンポラリーダンスという言葉そのものがあまり浸透

していませんでした）

しかし、コンテンポラリーというダンスクラスを受講するダンサー達は、まだ振付家の要求を受けたことない、作品もほとんど鑑賞していない若いダンサー達なのです。あくまでも、「そのとき」の準備なのです。彼らはドリルできる基本動作を覚えてもらうことを求めているのです。このような現状に、もともと「ないジャンル」のダンスを始めた私にとって、若手ダンサーとの間でコンテンポラリーダンスの未来に対する認識に、少々ズレがあるように感じるようになっていきます。

極論からするとコンテンポラリーダンスは「個性」ゆえ、トレーニングが不要という考え方もあります。振付家が良いと言えばそれでよいのです。しかし、私はそうは思いません。ダンサーが自己の運動能力を高度に発達させて踊る準備しておきたいと願うのは当然のことといえます。私の知る限り、現在第一線で活躍するコンテンポラリーダンサー達は相当な時間をかけて自己の心身を鍛練しているように見えます。アイデア勝負ではなく、むしろストイックな性格であると思います。彼らはダンスクラスで多くの人と一緒にレッスンをすることはなく、自己の身体と対話する時間を密にとっているように感じるタイプの人間が多いのです。

私が具体的に行っている訓練方法は、一見身体に強烈な違和感を感じるようなストレス（動き）を与えます。様々な状況設定によりこれを変化させていく。これを繰り返す中で多くの融合や分割を試み、免疫力を高め、強度のある身体を培い創造性を引き出す準備を整えていきます。また、呼吸のコントロールも大きな課題として取り組んでいます。これも、やはりあくまでもダンスクラスではなく個人的な濃厚な時間の中で行われています。

ダンスクラスはこの先さらにその数を増やすことになるでしょう。これは一つの普及の証明となります。ただ、参加者は皆で仲良く同じ課題（基本動作？）に取り組むつも、これは単に入り口であり、この先振付家と出会い、共に舞踊作品を誕生させるエネルギーを持ち合わせる勇気と忍耐から生まれる身体の強度が、本来の勝負どころなのだということをおぼえて欲しいと思います。つまり、ダンスクラスに参加して待っているだけでなく、いつかどこかで、個人的に自己の身体に向き合い、ある種の身体感覚が芽生えるまで時間をかけて鍛練し、自己責任で取り組まねば入口の次の2番目の扉は開かないのです。

もし、コンテンポラリーダンススタンダードを考えるとすれば、動き方の定番ではなく、環境刺激に耐える精神性のありかたなのではないでしょうか？

コンテンポラリーダンスが上手いとは、これまでの経験をフルに活用できる動きの解析力とそれを土台にした創造力がダンサーの身体に反映されている状態、であるといえるのではないのでしょうか？

以上のような可能性をはらんだダンサーの芽と出会うのであれば、ダンスクラスもその意義や可能性は十分にあるように感じます。多くのダンサー達は振付家と出会うのを待ち望み、「そのとき」の準備をしているだけなのでしょう。

現在、コンテンポラリーダンスも過渡期であると感じ、簡単に明快な答えを求めるインスタント的な思考はもはや通用しない時期が来ていると肌で感じとっています。私はダンスクラスが容易なスタンダードだけを作り上げ、そして提供するにとどまり、ダンサーのニーズに応えるままに定番を生むことでコンテンポラリーダンスの本来の魅力がそこなわれないよう注意したいと思っています。

そして、ダンサーの研ぎ澄まされた身体が発信元となり熱く、強いコンテンポラリーダンスが続々と誕生する、そんなエネルギーの渦を感じ大いに刺激を受ける、そんな時代に存在したいと願っています。